

コンピューター実践支援ツール活用による 地域福祉援助の方法に関する研究 (II)

樋下田 邦子

はじめに

- 第 1 章 本研究の目的と方法
 - 第 1 節 問題の所在と研究目的
 - 第 2 節 研究の方法
 - 第 3 節 研究の成果
 - 第 4 節 本論の構成
- 第 2 章 地域福祉の理解
 - 第 1 節 地域福祉の考え方
 - 第 2 節 福祉コミュニティの構成要素
 - 第 3 節 地域福祉の推進
 - 第 4 節 地域福祉推進の課題 …… (以上前号)
- 第 3 章 実践支援ツールを支える理論
 - 第 1 節 ジェネラル・ソーシャルワーク
 - 第 2 節 エコシステム構想
 - 第 3 節 実践過程のビジュアル化
 - 第 4 節 フィードバック機能 …… (以上本号)

第 1 章と第 2 章では、先行研究や臨床の経験から地域福祉援助の方法や課題について考察し、本論の研究目的、方法について述べてきた。これらから、地域福祉援助の方法は、利用者の生活や地域をシステムとして捉えて実践することが必要であるが、その捉え方が困難であることが分かった。そこで、この課題を解決する方法として取り組んでいるコンピューター実践支援が依拠する理論を地域福祉援助の視点から考察してみたい。

第3章 実践支援ツールを支える理論

今日、ソーシャルワーク実践は、利用者の生活をシステムに捉える方法としてエコマップやICFによるアセスメントなどが用いられている。本論は、「利用者の現実から本人の積極的な参加によって適応能力を取得・強化していくことであり、それへの最適な支援方法を提供することである。利用者の主導性を起点に、状況をめぐる固有でトータルな生活支援体制と活動を専門的な方法で推進する理念とその展開過程」というジェネラル・ソーシャルワーク理論をビジュアル化することにより、利用者とソーシャルワーカーとの参加と協働を可能にしようとするエコシステム構想に依拠した地域福祉実践支援ツールの開発を試みている。

第1節 ジェネラル・ソーシャルワーク

地域福祉援助への方法を活用するにあたり、ジェネラル・ソーシャルワーク概念、枠組み、特性について理解を深めたうえで地域福祉援助の方法から考察してみたい。

1. ジェネラル・ソーシャルワークの概念

ジェネラル・ソーシャルワーク実践は、利用者の現実から本人の積極的な参加によって適応能力を取得・強化していくことであり、それへの最適な支援方法を提供することである。利用者の主導性を起点に、状況をめぐる固有でトータルな生活支援体制と活動を専門的な方法で推進する理念とその展開過程を指し、次の8つの特性がある¹⁾。

《8つの特性》

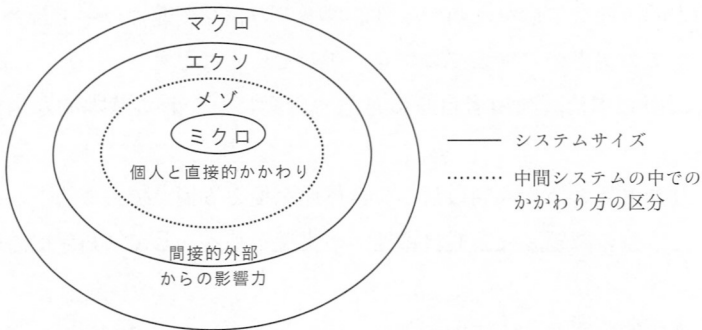
- ① 人間の社会生活を、内的・外的環境との相互関連性の中で統合全体性としての視点から捉えてアプローチしていくこと。
- ② 利用者本位、利用者自身の意識や行動にかかわる基本的な信念である。
- ③ 社会生活という人間の営みの全体像を捉える視点である。
- ④ 方法論の課題、社会的自律性への支援を基本としての科学的方法である。
- ⑤ 多角的な理論と方法でアプローチできるインターベンションを志向する。
- ⑥ 支援の焦点として問題と解決過程への新しい視点である。
- ⑦ 問題と最適な解決過程の展開を迫られる現実や期待から必然的に構想される多角的方法の統合レパートリーを強調することである。
- ⑧ ミクロとマクロを循環するフィードバック概念を展開しつつ、実践をシステムとして常に最適に機能させる包括・統合的な機能を持つ。

ミクロ・メゾ・マクロの総合や全体がソーシャルワークではなく、それらは実践のレパートリーである。したがって部分の総和を意味する概念ではない。ジェネラル・ソーシャルワークの実践特性は、利用者へのトータルな生活に包括・統合的な対応を試みる holism という視野と方法を持っていると考えることができる。

地域福祉実践から捉えた場合、ミクロ・メゾ・マクロはバラバラに存在しているのではなく、システムとして成り立っていると考えることができる(図3-1)。

ミクロシステムは、人間の直接的対面的接触を通じて発達を促進したり防げたりする最小の相互作用関係で家族、友人、近隣などが含まれ、システムの特徴として利用者の成長によって環境、マクロシステムが複雑になることから利用者を取り巻く家族や発達との関係が重要な構成要素となる²⁾。ミク

図3-1 ミクロからマクロシステムサイズ



出所：中村沙織『ソーシャルワーク・アセスメント』38頁（2002年，相川書房）。

システムに内包される利用者へはメゾシステムとして利用者の家族環境や生活，ソーシャルワーカーとの関係が影響力を持っている。

エクソシステムは，当事者を含まないが，その個人に重要な決定力や強い影響力を与える二つ以上の相互作用であり，親の職場の出来事，学校に兄弟姉妹がいる状況，家族の友人や仲間などが対象になる。たとえば，利用者を取り巻く介護環境，経済的な状況などが，利用者のパワーレスを引き起こして，問題可決状況などに影響を及ぼしメゾ，マクロシステムへフィードバックし，新たな過程局面となって展開することがある。

マクロシステムは，イデオロギー，習慣，政策，制度，多様な社会資源などが対象に含まれ，直接的システムレベルで起きる社会構造や活動に影響を与える「青写真」を社会に提供するものである。たとえば，利用者の自己実現を目指すさまざまな活動や支援を通したマクロからミクロシステム過程の蓄積が，サービスの改良や開発へ向かわせることがある。

中村は，「それぞれのシステムは，人間の成長過程と連動してミクロシステムからマクロシステムに広がり，フィードバックをとおしてマクロシステムからミクロシステムへと循環過程で実践がなされる」と述べている³⁾。

ソーシャルワークは，生活問題を抱えた利用者（高齢者・障害者・児童・家

族など)への支援であるが、生活問題を抱える以前に、私たちは「生きる人間」として、社会的自律性を持つことが必要であると思われる。なぜなら、生活問題を抱えてから、サービスを選択、契約することや、自己決定、課題解決能力を取得することは容易ではないと思われるからである。そこで、ソーシャルワークは、あらゆる場面(生活課題を持つ利用者だけでなく、地域福祉実践の場、教育現場など)で生かされることにその社会的意義があると考えている。

地域福祉援助の視点から捉えてみると、「サービス利用者＝地域住民」「サービス提供者＝地域住民」「サービス創造者＝地域住民」と考えることができ、「地域住民」が共通キーワードに浮かび上がってくる。さらに、地域住民は、マイクロからマクロまで含まれるシステムを持って生活している。そこで、ジェネラル・ソーシャルワークの「利用者」を「地域住民」に置き換えて、8つの特性を生かした地域福祉援助を試みている。特に、ソーシャルワークの専門性(ソーシャルワークスキル)が大切になることを強調しておきたい。

2. ジェネラル・ソーシャルワークの枠組み

しかし、実践概念としてのジェネラル・ソーシャルワークの課題に、① 支援科学という特徴を持つ実践方法論の枠組みの明確化(方法論)、② エコシステム概念の展開(展開理論)、③ 生態としての生活状況の把握(方法定式化)、④ 支援ツールとしてのコンピューター利用(支援ツール)、⑤ 科学的な生活支援へのエコシステム情報の処理と提供(シミュレーション)、⑥ 理論・方法・ツールを駆使した実践過程展開(支援活動)があり、実践概念として効力を発揮するには、これらのステップを経ることが必要であると太田は論じている⁴⁾。

そこで、これらの課題を解決するために、生態学的視野から実践支援ツールの開発と活用をすすめている。その実践方法論の枠組みは4つの基本的要

図3-2 key words に基づく実践枠組みの整理

- | | |
|--------|-----------------------------|
| ① 〈価値〉 | すべての人の問題を解決しようとする意識 |
| A | 思想 = 差別 → 人権 → 共生 |
| B | 目的 = 救済 → 援助 → 自己実現 |
| C | 理解 = 欠陥 → 同情 → 共感 |
| D | 対応 = 恣意 → 善意 → 責任 |
| ② 〈知識〉 | 環境, 内面生活, 社会生活などが人間や状況の理解 |
| A | 人間 = 個人 → 個人・家族 → 人と環境 |
| B | 対象 = 病理 → クライアント → コンシューマー |
| C | 視野 = 身近 → 地域社会 → 国家・国際 |
| D | 内容 = 隣接科学 → 行動科学 → 支援科学 |
| ③ 〈方策〉 | 制度, ネットワーク, 住民, 自治体の背景にある理解 |
| A | 論理 = 防衛 → 贖罪 → 権利 |
| B | 観点 = 施与 → 活用 → 開発 |
| C | 機能 = 統制 → 提供 → 支援 |
| D | 領域 = 経済 → 社会 → 全生活 |
| ④ 〈方法〉 | 専門職, 制度, 支援過程の展開 |
| A | 方法 = ミクロ → メゾ・マクロ → エコシステム |
| B | 展開 = 直接 → 直接・間接 → 統合循環 |
| C | 研究 = 勘と経験 → 実証 → シミュレーション |
| D | 関係 = 治療者 → 援助者 → パートナー |

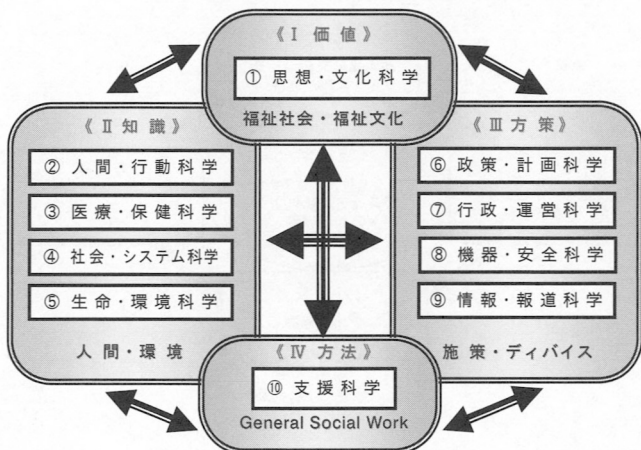
出所：太田義弘「関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科臨床福祉学特殊講義博士後期課程資料」2005年度。

素（価値・知識・方策・方法）からなる（図3-2）。

支援科学とは、社会的視点から人間の生活を援助するところにある。そのためには、援助の焦点や姿勢、施策の構成や展開などをめぐる科学的方法の特性「① 基本姿勢は、利用者中心にした支援方法、② 人間と社会生活への科学的な考察を可能にするものでなければならない、③ 生活環境や支援施策というマクロに対する積極的な視野と発想、④ 生活支援という目的を具体的に実現する方法」について理解を深める必要がある。

それは、医療・保健・看護・教育などの領域で生活や環境を視野にした包

図3-3 支援科学の構成



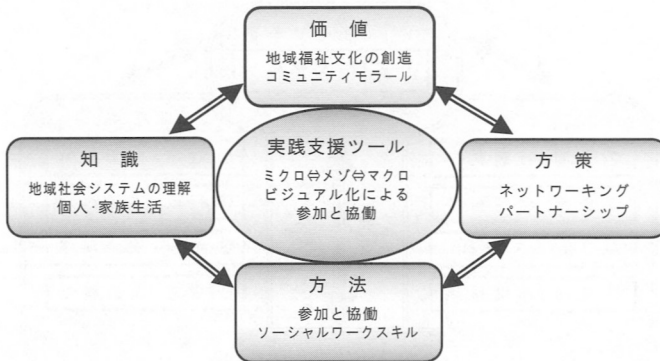
出所：前掲図 3-2 に同じ。

摂した共通意識のもとで、それぞれが専門的なアプローチを試行する時代のなか、究極的な目的や方法は類似している。そこで、隣接諸科学を視野に入れながら、ソーシャルワーク実践にとって期待される固有性とは一体何なのかを究明することが必要である。ジェネラル・ソーシャルワークは、固有な発想と方法を駆使して推進する支援過程、つまり、エコシステム構想により具現化しようとすることを意味する。人間の生活は、身近に実感として経験されながら、科学的に分析・把握することが困難であるため、より理解しやすくする方法的概念としてエコシステム構想によって理論的に整理し生活の全体像を把握しようとするものである。

それでは、地域福祉援助の枠組みとしてどのように応用することができるだろうか。

「ソーシャルワーク」としてのコミュニティ実践を考えた場合、直接的な対人援助としてのミクロの側面から、社会福祉の環境としての政策や運営、計画的変革にいたるマクロの側面をも内包するもの⁵⁾として捉えることがで

図 3-4 地域福祉援助過程枠組みへの応用



出所：筆者作成，2007年。

きる。

また、個人の主体形成力の醸成を基礎としつつも、「個人」「対人関係」「組織・集団」というレベルで分離的にソーシャルワーカーとクライアントとの間でのみ問題解決していくことを越えて、「地域」レベルでの社会福祉の国民化と地域化という面での社会福祉問題の相互理解や住民相互の支援関係を醸成していくことを社会福祉の固有なソーシャルワークとして構築する必要がある⁶⁾。そこで、前章で述べた地域福祉の課題から枠組みを考えてみると、図3-4に示すことができる。

「価値」は、地域福祉文化、コミュニティモラルを認識したうえで、新たな福祉文化を志向する価値意識の創造であるといえるだろう。「知識」は、地域で住む人の理解として、地域社会を系統的に捉える視点であり、個人や家族の生活、さまざまな社会サービス、地域経済などの現状を理解することであり、「方策」は、地域活動やネットワークの現状を理解する視点といえるだろう。最後に、「方法」は、地域福祉援助過程における地域住民とソーシャルワーカーとの参加と協働である。

これら抽象的な実践過程を認識しやすくするために、ビジュアル化した過

程を材料に、オープンにコミュニケーションが展開し、地域住民が主体的に参加することは、「価値」「知識」「方策」「方法」、つまり、ミクロからマクロまでを理解しやすくすると考えられる。

渡邊は、地域福祉の基盤となる主体形成の課題は、地域福祉問題の地域住民による共有化という道程を問うことなくして成立しない。さらに、コミュニティの曖昧性は、自然発生的にコミュニティケア意識を醸成することにはならないという理解に立つことを求めている。そこで、具体的方法論としてのアプローチの構築が求められ、このアプローチは、新しいソーシャルワークである⁷⁾。そこで、筆者は、地域福祉実践事例(第4章)から実践支援ツールを活用した地域福祉援助方法の成果や課題を考察することにチャレンジしている。

次に、ジェネラル・ソーシャルワークの過程特性の理解を深めて、地域福祉援助過程への応用について考察してみたい。

3. ジェネラル・ソーシャルワークの過程特性

秋山は、「ジェネラル・ソーシャルワーク実践の第一義的な目的は、人と環境の相互作用に焦点をあて、社会日常生活のなかで発生する問題や課題を解決・達成したり、問題の発生を予防したりするために、人の社会的機能を高めていくための、継続的援助である。ソーシャルワーカーは、個人、集団、地域がそれぞれ置かれた環境のなかで、より効果的に社会機能が発揮できるように、その方途を探り、支援していくことが必要となる。人と環境を構成する諸条件を整えたり、可能性を引き出したり、適応能力を高めたり、変容をもたらすことにより、人間の社会生活問題の軽減、解決、予防を目指している。」と論じている。

そして、ジェネラル・ソーシャルワーク実践は、ソーシャルワーク過程展開によるインターベンション方法であり、この過程特性には、① 政策・制度の策定過程、② 行政サービスの実施過程、③ 福祉機関・福祉施設の意思

決定過程，④ 民間福祉団体，地域福祉活動の形成過程，⑤ 人々の福祉意識の形成・変容過程，⑥ 価値の形成過程，⑦ 知識の集積過程と実体化過程，⑧ 人と環境の調整過程，⑨ 問題特定の設定過程，⑩ クライアントへの援助システムの形成過程，⑪ 援助システム（援助方法）の展開過程，⑫ 援助技術（技法）の展開過程，⑬ 問題の解決過程，⑭ クライアントの変容過程，⑮ 援助方法の反省・評価過程，などがある⁸⁾。ミクロからマクロへの循環システムがジェネラル・ソーシャルワークの特性である。

それでは，ジェネラル・ソーシャルワークの過程特性から地域福祉援助過程をどのように捉えることができるかを考えてみたい。

地域福祉援助過程には，ソーシャルワーク過程展開によるインターベンション方法が内包されていると理解できるのではないだろうか。前述している地域福祉援助技術や地域福祉計画策定におけるコミュニティソーシャルワーカーの役割・技術から分かるように，地域活動する人々の福祉意識・主体力の形成，問題解決力の向上や政策・制度，行政サービスへ積極的な関わりができるように支援するスキルが必要になる。

この地域福祉援助過程には，① 政策・制度の策定や行政サービスへ地域住民が積極的に関わる実施過程として地域福祉計画策定などがあり，② 福祉機関・福祉施設の意思決定過程では，サービスを提供する側，サービスを受ける側，サービスを創り出す側としての特性を生かすことが可能になり，③ これらへの参加やサービスの使用などから住民参加型組織活動や地域福祉活動の過程にいたり，④ それらの諸活動を経て人々の福祉意識の形成・変容過程，価値の形成過程へ展開し，⑤ 価値や知識の集積と実体化が地域住民と環境の調整過程，地域問題特定の設定過程から，⑥ クライアントへの援助システムの形成，新たな社会資源の開発や援助方法の展開過程，⑦ 具体的な援助技術の展開過程，地域福祉問題の解決過程へ展開し，⑧ クライアントのみならず，地域住民の価値意識変容過程へ，⑨ さらに，地域福祉援助方法の反省・評価過程と捉えることができるだろう。図 2-4（前号）

で示しているように、地域福祉援助過程には、マイクロ・メゾ・マクロの関係が空間軸と時間軸の実践過程に力動的な関係を持ち、マイクロとマクロ間で循環システムが機能していると捉えることができる。

ジェネラル・ソーシャルワークは、新たな地域福祉援助技術として考えることができるのではないだろうか。この仮説は、今後の大きな課題として受け止め、さまざまな地域福祉活動を蓄積して、科学化する必要性を強く認識している。

これまで、述べてきた論理を具体的に実践する方法が必要になる。そこで、その特性を実践行動概念として具体化するために、太田が論じているエコシステム構想について考察する。

第2節 エコシステム構想

エコシステム構想とは、とらえどころのない人間の生活という見えない世界を画像にし、問題や状況の変化や成り立ちを実感し理解できるようにする考え方である。私たちは、この世に誕生してからさまざまな環境から影響を受けて、一人ひとりが固有な生活コスモス⁹⁾を保有している。エコシステム構想は、日々の変化やさまざまな事柄の積み重ねからなる「生きている過程」を見ることができるよう近づけていくひとつのアイデアと捉えることができる。

1. エコシステム構想によるソーシャルワーク実践の意義

筆者は、分野別、レポートリーという捉え方をしないで、「ソーシャルワーク＝地域福祉援助技術」として考えて実践へ取り組んできた。しかし、ソーシャルワーク理論や実践枠組みが、地域福祉実践として科学性と普遍性を持ち、具体的に活用するには、エコシステム視座からソーシャルワークを捉え、地域福祉実践事例を積み重ねる必要があると考えた。

ソーシャルワークは、人と環境に働きかける実践であるが、実践過程を力動的な時系列として捉えることが難解であり、ある時点の単発的な静的特性を評価することが中心である。しかし、人と環境の力動的な関係を持つソーシャルワークは、動的特性、相互関係を評価することにその特性として意義がある。人と環境を生態学的な特性と位置づけ、実体、生きざまとして把握するためにエコシステムの視点からソーシャルワークを捉えていると理解できる。

エコシステムとは、生態学の領域において、生態系あるいは生態システムといわれる概念で、生物群集と環境との密接な相互関係を意味する用語である。その関係は、気候や土壌が生物に作用をし、その生物がまた土壌や群集内の気候に影響をおよぼし、エネルギーや物質が群集の機能によって環境から摂取され、生物体になり、生物の間を循環し環境にフィードバックされるという自然な作用を示しているわけで、このような「エネルギーや物質が流転し、循環している機能系として生物群集と相補的關係にある環境をいっしょにしたものが生態系 (ecosystem) である」と考えられている。

時系列変化のなかで積み上げられた変容過程としての人間と環境との相補関係を捉え、その適合関係の改善を図っていく発想としての生態学的な視点、これを実践理論として整備しようとする概念がエコシステムという発想である。つまり、利用者支援への科学的なアプローチとしての方法である。このような視点が、ソーシャルワーク実践へのエコシステム発想として、クライアントの生活を環境との有機的循環作用のなかから把握して、ソーシャルワークを統合的に捉える視角である。

現状としては、問題を分析・把握する視点や、その解決への接近を具体化した実践過程 (構造・機能・変容) モデルのひとつではないことから、モデルを包み込んで展開する視座であり、強いていえばアセスメントのためのモデルであると考えられている。太田は、ソーシャルワーク実践の展開構図 (paradigm) であり、実践モデルを展開するためのモデル (metamodel) という

表 3-1 エコシステムの発想によるソーシャルワーク実践の意義

- (1) 多様な要素の交錯する生態としてのクライアントの社会生活過程を考察の基点にすること
- (2) 人と環境との相互関係を生活領域の拡がりとしてとらえ、クライアントの生活をトータルな視野から考察すること
- (3) クライアントの生活状況を適切に把握し、総合的視点より援助として効果的に提供すること
- (4) 生活を構成するミクロとマクロの視野からフィードバックさせる循環概念として展開すること
- (5) クライアントの持つ変容と均衡維持への社会的自律性の援助を主眼とすること
- (6) 最適な援助をするために、システムという実践の積み上げからなる過程概念の展開をすること

出所: 太田義弘『ソーシャルワーク実践とエコシステム』113-114 頁 (1999 年, 誠信書房)。

視座が、エコシステム概念であると述べている¹⁰⁾。

そして、ミクロからマクロまでの事象を視野に、人間の個別的な生活環境、さらに社会福祉を支える社会資源、社会福祉制度や政策までのシステム関係を視野にいれておかなければならない (表 3-1)。

つまり、ソーシャルワーク過程での、時系列変化のなかで積み上げられた変容過程としての人間と環境との相補関係を明らかにしていく科学的な支援であると考えることができる。

太田は、「過程とは、クライアントとソーシャルワーカーとが協働し、生活援助を通じた課題解決や、それによる変容・成長を目標に、時間的経過のなかで局面を展開して提供する一連の援助行為の積み上げからなる実践活動であり、その成果は、フィードバックされ、さらにクライアント援助に焦点化される科学的かつ専門的な援助システムの流れ」と定義し、クライアントの生活援助と社会的自律性を目的にしていること、参加と協働、実践活動の積み重ね、マクロの援助方策からフィードバックし、ミクロのクライアント援助へ循環される過程を持つものである¹¹⁾と述べている。

社会福祉は、人々が生活する時代の価値と目標を理念とし、実践に向けて

具体化した制度であり、その目的を志向するのがソーシャルワーク実践活動である。ひとりの固有な人間として存在する意義、その人間が自己実現、社会的自律を通して生活環境を築き上げる実践活動がソーシャルワークと捉え、繰り返しになるが、「ソーシャルワーク＝地域福祉援助技術」と考えている。

2. ソーシャルワーク実践過程のエコシステム構想

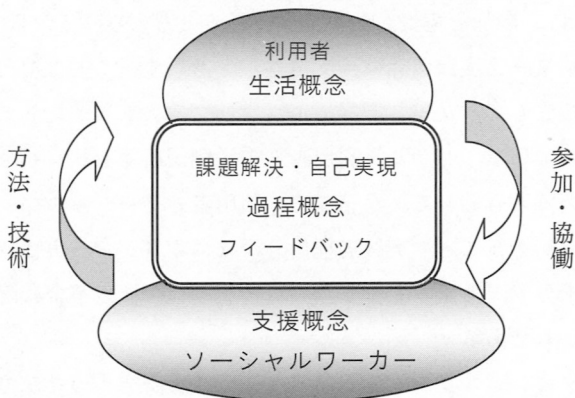
ここで、もう一度ソーシャルワークの概念を振り返り、その視点、目的、方法、実践過程について理解を深めてみる。

ソーシャルワークとは、人間と環境からなる利用者固有の生活コスモスに立脚し、より豊かな社会生活の回復と実践への支援を目標に、独自の支援レパートリーの的確な活用による社会福祉諸サービスの提供と、利用者自らの課題解決への参加と協働を目指した支援活動の展開であり、さらに社会の発展と生活の変化に対応した制度としての社会福祉の維持、その諸条件の改善・向上へのフィードバック活動を包括・統合した生活支援方法の展開である¹²⁾。つまり、社会福祉の目標を達成するための実践活動であり、その過程では、利用者とソーシャルワーカーとの参加と協働に特徴があると理解できる。

ソーシャルワークが志向することは、利用者が培ってきた固有な空間と時間を尊重し、利用者の生活コスモスを捉え、利用者の日常生活の改善や継続、生活の質の向上であり、さらには、誰もが住みやすい地域社会の構築であると考えることができる。その過程は、積極的な参加と協働を軸に、利用者の社会的自律性の向上、取得を可能にするための支援が特徴であるといえる。「利用者の持つ社会的自律性（competence）という人間と環境から構成される固有な課題解決・適応・自己実現への能力を育成・支援することが原則ということになる。」¹³⁾

太田は、ソーシャルワークの定義について「生活概念・支援概念・過程概

図 3-5 ソーシャルワークの三大特性概念



出所：太田義弘・中村佐織・石倉宏和編著『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング——利用者参加へのコンピュータ支援』8頁（2005年，中央法規出版）。

念」の三つの特性からなると述べている（図3-5）。

生活概念は、その人自身と環境とを含んだ生態学的で多様なシステムからなり、利用者自身にとっては、一つひとつの具体的な出来事の積み重ねからなる現実である¹⁴⁾。しかし、この利用者固有の生活は他者には、見えにくく、理解しがたい現実である。そこで、難解な利用者の多様な生活をシステムとして理解し、環境との関係や流れを生態学的に把握し、実践現場で適応できるようにコンピューターを活用して理論と実践の架け橋の役割を果たそうとするのが、エコシステム構想という方法になる（後掲図3-6）。

支援概念は援助者側の枠組みや方法ではなく、利用者自身の持つ力を引き出すこと、つまり、社会的自律性から利用者自身の課題解決能力や自己実現能力を育成することである。筆者の臨床経験は、利用者側に立脚してきたのかと振り返ってみると、筆者の価値や知識、経験で実践してきたことに気づき、深く反省することが多い。特に、利用者が認識する生活状況とソーシャルワーカーが見えている生活状況の違いや実践過程の分かりにくさ、見えに

くさからソーシャルワーカーが誘導することがあるように思える。つまり、その過程には、「参加と協働」が不十分であると考えられるからである。

ソーシャルワーク実践研究は、支援過程を考察することと捉えることができ、その方法として、ケース記録やエコマップ、アセスメントツールなどを用いて行われている。しかし、利用者と支援側が情報を共有して話し合うことは困難であると思われる。なぜなら、利用者とソーシャルワーカーの価値や知識に差異があることや実践過程の分かりにくさから、実践過程への利用者参加が不十分で、ミクロとマクロ間の循環過程が機能不全に陥る可能性を持っているからである。

岩間は「ソーシャルワークにおける媒介実践論研究」のなかで、ソーシャルワーク機能としての「媒介し続ける」とは、何らかの「結果」に行き着くまでの「プロセス」の強調であり、「自己決定を支える」という実践の具体化である。つまり、利用者とソーシャルワーカーが対等な立場で向き合い、相互作用関係を進展させ、現実の直視と新しい気づきを促しながら利用者たちが歩むプロセスを支えることである¹⁵⁾。

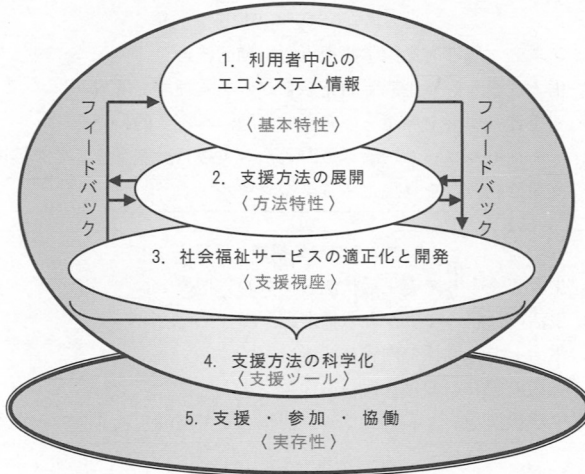
ソーシャルワーク実践過程のエコシステム構想は、これらの課題を解決しようと試みている考え方である。

3. エコシステム構想の目的と方法

それでは、エコシステム構想からソーシャルワーク実践過程をイメージするとどのようになるのだろうか。

このエコシステム構想というアイデアから得た情報は、利用者の主体的な参加とソーシャルワーカーとの協働で検討する材料となる。なぜなら、情報は、あくまでも情報であり、内容を深く分析するのは、専門職としてのソーシャルワーカーであり、同時に利用者でもある。たとえば、頭痛があるという主訴に対して、医師は、問診、触診、血液検査、レントゲンなどさまざまな検査をする。その検査結果を、医師と患者は、視覚的に共有することがで

図3-6 エコシステム構想の目的と方法



出所：前掲図3-2と同じ。

き、患者自身が疾病を治そうと取り組む力を引き出すことが可能になる。そこには、医師としての専門性を発揮した診断がある。ソーシャルワーク実践過程においても、ソーシャルワーカーの価値・知識・方法などのスキル発揮がクライアントにさまざまな影響を持つといえる。

ソーシャルワーク実践過程へのエコシステム構想の目的と方法は、次のように整理することができる (図3-6・表3-2)。

- ① 利用者情報、利用者の生活コスモスを基本特性として捉え、利用者の課題可決と自己実現が目標であること。(図3-6の利用者中心のエコシステム情報)
- ② その特性やニーズに沿った最適な支援方法は、マイクロからメゾ、マクロを網羅した包括・統合的な支援であること。(図3-6の支援方法の展開)
- ③ 利用者への支援過程を通して得た情報から、社会福祉サービスの改良や開発へフィードバックする過程を持つこと。(図3-6の社会福祉サービス

表 3-2 エコシステム構想と支援ツール

エコシステムの視座	
A	システム思考と生態学的視点の相補的統合
B	生きざまという生態学的発想をシステム理論で解説
C	利用者の生活を環境との有機的循環から統合的に把握
D	ソーシャルワーク理論への導入から実践行動概念としての展開
E	実践行動概念を具現化する支援ツール

エコシステム構想と情報	
A	生きざまとしての生活状況をリアルに把握
B	生活の仕組みや広がり (構造)
C	生活上での関係や内容 (機能)
D	生活の流れや変化状況 (過程)
E	生活状況をシミュレーション情報として把握

出所：前掲図 3-6 に同じ。

の適正化と開発)

- ④ 見ることが困難である利用者の生活をシステムとして捉えるエコシステム構想による支援ツール活用は、ソーシャルワーク実践過程を科学化すること。(図 3-6 の支援方法の科学化)
- ⑤ エコシステム構想による情報は、回答や結果ではなく、利用者とソーシャルワーカーが共有し検討する材料であること。(図 3-6 の実存性)

ソーシャルワーク実践過程における利用者の生活コスモスを、生活の仕組みや広がり (構造)、生活上での関係や内容 (機能)、生活の流れや変化状況 (過程) から捉え、生活状況をシミュレーション情報として把握することが、エコシステム構想であると考えられることができる。さらに、ソーシャルワーク実践研究は、支援の過程を考察することと強調するだけでなく、ソーシャルワーク理論への導入から実践行動概念としての展開すること、実践行動概念を具現化する支援ツールとして期待できる (表 3-2)。

筆者は、在宅介護支援センターのソーシャルワーカー時代、さまざまな医

療関係者と連携、協働をして利用者を支援してきた。看護師は、看護計画を作成し定期的に、MDS方式や他のツールを活用して評価をしていた。PTやOTも同様に、客観的に分析し利用者へ説明していた。そのたびに、ジレンマを抱いていた臨床であったことを振り返る。

それでは、実践過程のビジュアル化はどのような方法で可能になるかを考えてみたい。

第3節 実践過程のビジュアル化

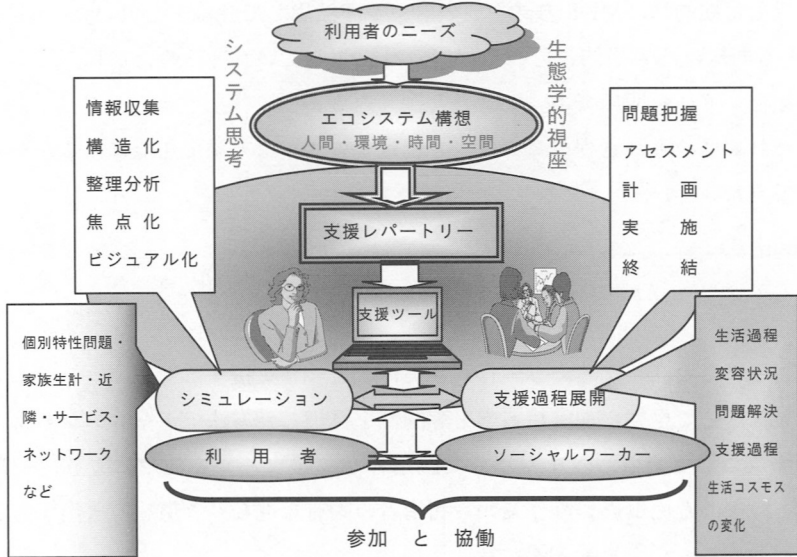
利用者の生活状況という実存的な実体に近づき支援するためエコシステム構想は、その至難な現実科学と専門性を具備した方法でチャレンジしようとするのである¹⁶⁾。まさに、実践過程を支援ツールの活用により、利用者との参加と協働という作業から利用者の固有な進むべき道を導き出す方法と捉えることができる(図3-7)。

1. 実践過程理解の支援ツール

ソーシャルワーク実践過程は、利用者の変容し続ける生活をどのように把握することが重要であるが、視覚的にとらえどころがないという点に問題がある。エコシステム構想とは、利用者の生活をミクロからマクロまでの成り立ちや内容が、さまざまな影響を受けて変容する状況を立体的に捉えることを意味している。

医療の分野からイメージすると、医者は、患者の主訴と生活習慣、職業、家族構成や関係、社会における役割なども含めて、さまざまな検査(レントゲン・血液検査・心電図など)から疾患を診断する。その際、さまざまなデータを患者と共有し、治療方針を決めていく。治療までの必要な期間で、患者自身が主体的に疾患を治そうとする姿勢が伴って効果的な治療ができる。つまり、一方的に診断されるのではなく、さまざま検査結果を視覚的に共有して

図 3-7 エコシステム構想の展開と支援ツール（イメージ）



出所：前掲図 3-6 に同じ。

いと考えることができる。専門的な知識を持たない患者と、すべてを共有できることに限界があるにしても、コミュニケーションだけで伝えるよりは効果があると思われる。

ソーシャルワーク実践過程における利用者とソーシャルワーカーとの間でも、「価値や知識」の違いから、すべてを共有できるとはいいがたいが、より見える、分かりやすい世界に近づけようとするためのひとつの方法（アイデア）として活用することは意義がある。なぜなら、ソーシャルワークは、ソーシャルワーカー個人の力量、勘、経験に依拠している現実があり、筆者の臨床経験の場面においても「あなただからできたけど、他のソーシャルワーカーはできなかったとは思えない。」「あのソーシャルワーカーが辞めてから、〇〇病院は評判が良くない。」などを耳にする機会があったことは否定できない。

ソーシャルワーク実践は、図 3-7 に示すように、利用者の生活コスモスを理解し、利用者の課題解決と自己実現、利用者固有の生活を継続するための支援展開に特徴がある。「勤や経験」に頼ることから、利用者の生活を共通理解する「実践過程理解の支援ツール」として期待できると思われる。

地域福祉援助過程においても同様であり、マイクロとマクロ間の循環システム過程局面の理解や共有が容易になり、システム間のフィードバックが機能すると考えられる。「実践過程理解の支援ツール」は、利用者主体、地域住民主体を可能にするひとつの道具として活用できると思われる。

2. 実践過程局面のイメージ

ソーシャルワーク実践場面で活用されるツールとして、「ジェノグラム」「エコマップ」、ケアマネジメントで用いられているアセスメントツールなどがある。ジェノグラムやエコマップは、利用者を中心に家系図や生活の全体像を表現し、利用者との関係性からニーズや問題を分析する方法として用いられている。ケアマネジメントのアセスメントツールは、さまざまな改良が行われ、2004年度からICFの考え方が導入されてきている。しかし、これらのツールは、利用者固有の生活状況をより詳細に把握し分析するには、工夫の余地があるように思われる。特に、「利用者との参加と協働」という視点については、活用方法に工夫の必要性があるのではないだろうか。

また、地域福祉領域においては、コミュニティ・ワークの手法が用いられ積極的な住民参加により、地域福祉計画や地域福祉活動計画が策定されている。課題で述べているように「地域福祉計画へ参加した住民が居住地域へどのように効果をもたらしたのか」、「地域福祉計画へ参加した住民の課題解決能力の取得や社会的自律性の評価」などが実施されることは少ないと思われる。つまり、地域福祉計画を策定する側と参加する住民側が実践過程局面をどのように認識しているかを把握する作業が確立されていないからではないだろうか。そこで、多くの住民が参加した機会を活用する方法として、

「エコシステム構想による実践支援ツール」を地域福祉版に改良し使用することでこれらの課題を解決に導く可能性があるのではないかと。

ソーシャルワークや地域福祉援助技術の現状認識を踏まえ、エコシステム構想における実践過程局面（図3-8）について考察したい。

まず、エコシステム構想の「構造・機能・時系列変化」からなる実践過程がベースにある。第1局面での、「ミクロからマクロまで領域」「そこでの関係性や内容」をコンピューターにより情報処理を行う。たとえば、入力は、利用者や住民、ソーシャルワーカーが行う方法があるが、情報処理された結果は回答でなく、情報やその差異について「参加と協働」しながら検討する。そして、第1局面での現状認識から目標の設定を行う。この作業は、利用者や住民の成長と変容を引き出す過程になる。

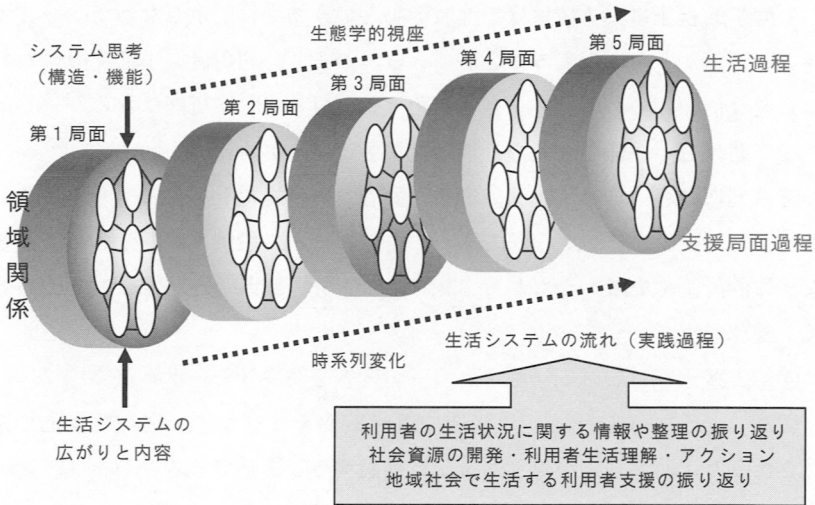
次に、定期的、もしくは、必要に応じて行い、第2局面、第3局面へと時系列変容をビジュアル化することにより、利用者、住民自身自らがその変容や成長、あるいは、新たな問題に気づくことができる。つまり、時系列に変容する生活システムの流れ（実践過程）を生態学的視座により把握することになる。

本論の実践事例である助け合い組織メンバーは、このような実践過程に主体的に参加し、利用者の生活状況に関する情報やサービス提供、活動状況を視覚化することにより、利用者の生活や地域状況を理解し社会資源の開発、ソーシャル・アクションへつながり、地域社会で生活する利用者支援のあり方について考えることができると期待している。

この支援ツールは、龍谷大学の太田（現在は関西福祉科学大学）を中心に1999年に発足した「エコシステム研究」メンバーを中心に、大学での社会福祉援助技術演習で使用され研究が継続している。その詳細な成果や方法は、2005年に出版された『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング』を参考にさせていただきたい。

筆者は、学習支援ツールとして開発されたツールを、地域福祉実践版に改

図 3-8 エコシステム構想による実践過程局面の理解のイメージ



出所：前掲図 3-6 に同じ。

良を試みて事例研究をしている。

3. 支援ツール活用による方法

そこで、図 3-8 のエコシステム構想によるコンピューターのシミュレーションから可能になる地域福祉の支援方法には、次の 6 点を考えることができる。

① 地域活動に関する情報の収集と整理や分析

地域活動の現状をシステム思考から捉えることで、利用者の自己実現や活動目標までの実践過程を具体的にイメージできる。現段階として、何が問題であるのかを「構造・機能・時系列変化」の視点から理解を深めることができる。

② シミュレーションを通じた必要な情報の提供

生態学的視座による情報は、地域活動という領域に限定しないで、地域生活という広がりから捉えることができる。つまり、利用者の生活支援のために必要な情報について、さまざまな角度から見る事が可能になる。

③ 助け合い組織の地域福祉活動状況をビジュアル化

時系列に変容する第1局面、第2局面と、実践過程をビジュアル化することにより、変容を見ることが出来る。さらに、次の段階へ展開するのに必要な具体的計画や実践へつながっていく。つまり、実践の継続性についての意義を確認できる。

④ 実践過程における活動メンバーの変容を時系列で表示

援助システム（活動状況）の構造や機能特性をビジュアル化、数量化することにより、時系列別のグラフを比較検討することが出来る。つまり、変容過程を見ることができ、同時に情報の共有が可能になる。

⑤ 活動状況と実践過程の多様な変容状況をデータ保存

段階別に入力したデータは、コンピューターを使用することで保存が可能になり、教育プログラム開発などへ活用することが出来る。さらに、活動メンバー自らが教育プログラムを開発、計画することが可能になる。

⑥ 実践支援ツールを介した住民との参加と協働

ソーシャルワーク実践は、利用者、住民、活動メンバーの成長や変容を引き出す過程である。この実践支援ツールは、あくまでも「ひとつの手段＝道具」であり、それを効果的に活用するには、ソーシャルワークスキル¹⁷⁾が必要になる。活動状況の構造や機能特性をビジュアル化、数量化されたデータを活動メンバーと共有、分析し、活動メンバーとのコミュニケーションを介してのエンパワメントアプローチを図ることなどである。

第4節 フィードバック機能

これら、実践支援ツールを支える理論「ジェネラル・ソーシャルワーク」、その具体的な実践方法としてのエコシステム構想は、「フィードバック機能」を持つ点も特性である(図3-6の社会福祉サービスの適正化と開発)。

そこで、「フィードバック機能」について考察した後に、筆者が考える「フィードバック機能」を示してみたい。

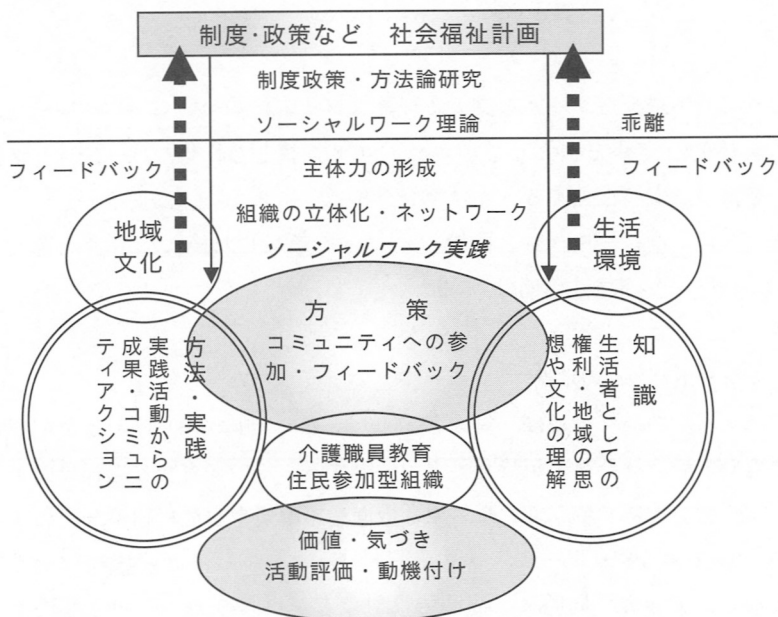
1. フィードバックの定義

ソーシャルワーク実践は、対象者(利用者、組織、地域など)や対象を取り巻く環境や生活、社会などが時間軸上で変容する。その変容する過程局面が対象者(利用者、組織、地域など)や対象を取り巻く環境や生活、組織が所属する団体、地域や制度・サービスへフィードバックしていると臨床経験から捉えることができた。同時に、局面では対象者が自らの力で問題を解決するために、環境との交互作用などからコンピテンスを獲得している。そこで、時間的経過の局面に生じる力動的なフィードバック過程を明らかにし、そのフィードバック過程を地域住民と共有することが重要になると考える。

たとえば、目標までの時間軸を捉えた場合、ソーシャルワーカーと対象者(利用者・活動メンバー)の役割や対等性、対象が持つ現在の力、「価値」の共有を行うことが必要になる。とかく実践は、支援する側が対象の成熟度を一方的に理解し、不足部分に支援してきたために対象者が受身になっていた傾向がある。

そこで、結論や結果を提示する手法ではなく、自分たちが気づき、現在の自らの力を認め、自己評価などを高めていく過程が重要になってくる。新たなニーズに対して、解決できない問題は、制度政策や他の原因に置き換えてしまい、地域住民がコンフリクトを生み出す原因になることがある。

図3-9 ソーシャルワーク実践におけるフィードバックの整理



出所：2002年筆者作成を2005年改良。

ソーシャルワーク実践局面の変容をフィードバックとして機能させることが実践活動の持つ独自性であるといえる。平面的な活動が立体的「三次元構造（構造・機能・変容）プロセス」になるには、ソーシャルワーカーの生活を捉える視点（エコシステムの視座）からのアプローチと、実践からのフィードバックが必要と考えることができる。

地域福祉計画，制度政策に，住民の参加が叫ばれる昨今，計画側（国や行政）と地域住民の意識の温度差は，広がるまま「住民参加」「住民の組織化」「ネットワークの構築」などが，実施されていることは否定できないだろう。これらの実践に，生活者の参加過程が見えないのはなぜだろうか。そのひとつとして考えられることが，「先に制度政策・財政がありき・数値達成

目標」からスタートしていることではないだろうか。

社会福祉基礎構造改革の基礎とは、法構造の基礎であるが、福祉実践や国民の福祉ニーズに対しては「上部構造」になる。つまり、基礎構造改革は、福祉の基盤の改革はなく、福祉の上部構造の改革であり、上部構造が基盤となる福祉実践や国民のニーズを改革しようとするものである¹⁸⁾。

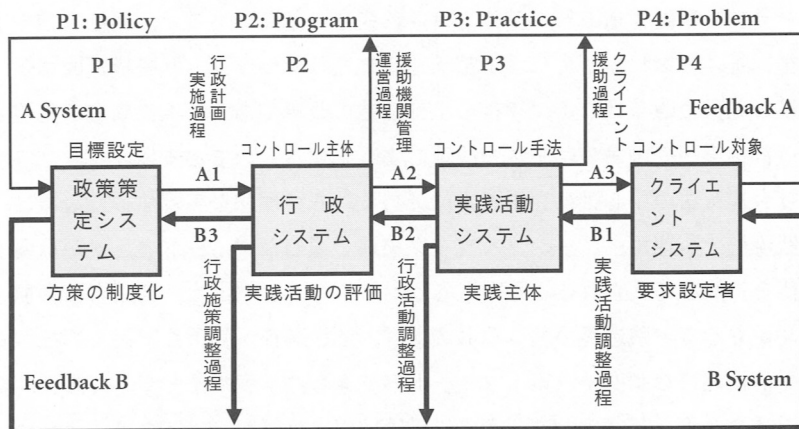
社会福祉法の中心軸は利用者本位である。その理念を実現するためには、実践現場での運用、ソーシャルワーク実践を通したフィードバックが重要な機能を持つと考えられる。なぜなら、ソーシャルワークは、利用者の参加と協働からなる実践過程の積み重ねであり、その過程から得た国民の福祉ニーズや福祉実践を制度・政策へフィードバックし、制度やサービスの修正、新たな法や制度の構築を目指す活動と理解するからである(図3-9)。さらに、研究領域においても、ソーシャルワークが、制度・政策研究と方法論研究に分離していることが多く、実体とする生活と乖離が生じているように思えるからである。

ここで、筆者は、ソーシャルワークや地域福祉実践から、「フィードバックとは、ソーシャルワーク実践機能が社会福祉の目的に向かうための維持、均衡の働きである」と定義しておきたい。そして、主体は、ある活動を行った対象だけでなく、これらの主体を取り巻く地域、状況、環境やサービス評価を行った利用者も主体になりうる。また、フィードバック対象には、これらの主体、主体の属する実施機関、教育機関、行政機関、ソーシャルワーク実践過程が含まれると考えている。

2. ソーシャルワーク実践過程におけるフィードバック

太田は、ソーシャルワーク実践のフィードバック過程において、援助過程システムの展開をソーシャルワーク実践の特性とし、価値、目標、主体、客体、機関、場面、方法、機能の8特性に分類している。ミクロのクライアント援助に焦点化されたA system 援助システム過程は、P1 → P2 → P3 → P4

図 3-10 実践の制的システム構造



P1：国家・社会 P2：地方自治体・行政機関 P3：実践機関 P4：クライアント

A System = micro process: 援助過程 B System = macro process: 実践政策調整過程

出所：太田義弘，前掲『ソーシャルワーク実践とエコシステム』181頁。

と展開し、B system 実践政策調整過程システム P1 → P2 → P3 → P4 と展開し、援助過程 A system と実践政策調整過程 B system とが、相互に循環しながら、2通りのシステム過程を形成している¹⁹⁾(図 3-10)。

そして、システム過程は、クライアント援助過程 A3、ミクロのシステム過程と、そのシステム内部に存在する過程局面（インターク⇒アセスメント⇒プランニング⇒インターベション）と呼ぶプロセスからなる。この2通りのソーシャルワーク実践過程にはミクロとマクロに焦点化された実践過程である。援助過程 A system を中心にシステム展開を考えると B system の実践政策調整過程がフィードバック過程と位置づけられる。援助過程 A system のフィードバックは、B1・B2・B3の動きであり、実践活動システムから政策策定システムであり、同時に援助過程に循環しクライアントの目標にフィードバックされる。それは、クライアントの生活支援に必要とする社会資源の開発

や改善または、過程局面（インターク⇒アセスメント⇒プランニング⇒インターベション）へのフィードバックなどである²⁰⁾。

阪口は、フィードバックの主体に「ある取り組みを行った主体だけでなく、それ以外によって制御しようとすることも、フィードバックと捉え、フィードバックの対象には、ある取り組みを行った主体に働きかけるだけでなく、取り組みを改善するためにその主体以外に働きかけることも、フィードバックと捉える。」そして、「フィードバックとは、① ある主体によって実施されてきた取り組みとその結果についての情報を把握し、② その情報やその情報の分析結果に基づき、取り組みの目標や方法を改善する必要性、及び目標や方法について改善案を検討し、③ その改善案を現実に導入しようとするものである。」と定義している²¹⁾。

以上から、実践過程の持つ特性である構造や機能を時間的、空間的に考慮しながら、利用者の自己実現の目標に向かっての変容状況を明らかにすること。さらに、人間の固有な生活体験に基づく価値観や心理特性などの変容過程に介在する構造や機能を分析することが必要と思われる。本研究においては、エコシステム構想に依拠した実践支援ツールを活用した地域福祉実践からフィードバック機能を可能な限り考察していきたい。

3. 地域福祉実践過程におけるフィードバック

ソーシャルワークにおける評価については、従来からその重要性が強く指摘されながらも、実践に基づいて行われていることは少ないのではないだろうか。この背景要因として、岩間²²⁾は、評価活動の体系の蓄積や評価のための理論と方法の構築に向けた取り組みが積極的にされてこなかったことが指摘できるが、その一方でソーシャルワークが内在的に持つ特性とも無関係ではないとし、ソーシャルワークにおける評価の論点として、「誰からみた評価なのか」、「何を評価するのか」、「データをどのように処理するのか」、「モデルや援用理論との整合性」について論述している²²⁾。

ソーシャルワーク機能のひとつとして、クライアントシステムにもたらした変化を評価することが求められるが、専門の評価基準のなかに、クライアントの「本人側」に評価の視点を持つことが重要になる。つまり、「クライアントの側から見た評価」である。これが、ソーシャルワークに質的评价が求められる要因のひとつである²³⁾。

地域福祉援助過程においても同様のことがいえると思われる。地域福祉計画策定への住民参加を例に取り上げてみると、「参加した住民と策定する側の参加と協働はできているのか、参加する方法は策定する側が決めていないのか、出来上がった計画は、誰が評価するのか、何を評価すればいいのか、参加した住民の意識の変容は評価したのか、参加した住民が住む地域と福祉コミュニティ形成の関係はどうか、サービスの改良や開発にどのような効果があったのか、策定過程における課題がどうか」などが根拠に基づいて評価されているとは限らない。

筆者は、地域福祉援助過程において、積極的に地域活動するメンバーとの「参加・協働」を心がけてきたが、限界があることは再三述べてきている。エコシステム構想は、利用者システムをマイクロからマクロまでをビジュアル化することで、実践過程を利用者と共有することができる。つまり、利用者システムを「利用者側」と「専門職としてのソーシャルワーカー側」から見ることでできるわけである。これは、ソーシャルワーク固有の視点と理解することができるが、他職種との協働や連携で積極的に伝えていくソーシャルワークの基本的な立場であると考えることができる。

さらに、実践過程での協働作業の積み重ねを「利用者側」と「専門職としてのソーシャルワーカー側」により評価した情報、成果、課題を実践過程やマイクロ、メゾ、マクロへフィードバックする必要がある。なぜなら、「視野を自然に向けると、われわれが認識すると否とにかかわらず、微妙なシステム関係のもとに森羅万象は、マイクロとマクロとをフィードバックするエコシステムのサイクルで存在し、機能していることに気づく。そして、われわれ

の生活がまた、まさに開放的なシステム関係のもとに、つねにフィードバックしていることに、ようやく気づきはじめていたのである。]24) 利用者の持つ問題の側面を捉えて生活の一部へ焦点化するだけでは、生活コスモスの理解が不十分であり、生活の継続性に対応した実践とはいえないと理解できる。

まさに、ミクロとマクロをシステム思考と生態学的視座で結び発想が、エコシステム構想にはほかならない。生態学的には、ミクロとマクロとの関係は、ひとつは人間と環境との関係に置き換えることが可能である。システム的には、部分と全体あるいは要素と組織、生活ということは、個人と社会、さらにソーシャルワークということでは、援助と計画あるいは活動と施策などと類似することができよう⁹⁾。

筆者の実践のみならず、利用者側に特化したミクロ実践、また、制度、政策からのマクロ実践という2極化した社会福祉実践は、実践と理論、ミクロとマクロの乖離という状況をつくりだしてきたと考えることができるのではないだろうか。

太田は、ミクロとマクロの課題に対する姿勢や問題として次の8点を整理している。

- ① 制度としての社会福祉の持つマクロ的優位性
- ② マクロからミクロへ既定化された社会福祉援助の流れ
- ③ 狭窄化したミクロ的方法論の姿勢と問題
- ④ 社会福祉従事者のミクロ的視野に固執した援助姿勢の問題
- ⑤ 社会福祉従事者の持つマクロ的発想の欠落
- ⑥ クライアントのもつ狭窄したミクロ意識や期待
- ⑦ ミクロ的課題とマクロ的課題の取り扱い上での不連続性
- ⑧ マクロ的方法論の欠落

などを克服されなければならない問題としている²⁵⁾。

これら8つのミクロとマクロの課題は、地域福祉実践にもいえることである。制度・政策・数値目標からスタートした地域福祉は、サービス提供とい

うマイクロから出発している。特に、地域福祉計画は、マクロに着目する傾向があり、住民個々人の主体形成や社会形成機能を評価してきているだろうか。2000年の社会福祉法の制定により、「住民参加」がうたわれているが、それを具体化する方法はさまざまである。たとえば、ワークショップの方法を取り上げた場合、「住民から出された問題」を「地域状況の把握」にとどめ、参加した住民自らが解決する方法へ結びついていなかったり、策定した計画へどのように反映されているか、示されていないことがある。

強調したいことは、どのような方法であれ、「活動する側」と「専門職としてのソーシャルワーカー側」が「地域活動や地域状況の情報（マイクロからマクロ）」を共有・評価し、成果や課題を行える地域福祉実践の方法が必要ということである。「参加と協働」が軸となる実践過程は、フィードバックが機能すると考える。

そして、地域福祉実践過程は、マイクロからマクロシステムへ、そしてマクロからマイクロシステムへ循環し、これらのシステムを構成するさまざまな要素（利用者・家族・地域・制度・行政・サービス実施機関）を通して、問題の解決や目的に対応するために通常のシステム循環とは逆の循環が機能すると理解できる。

太田は、「過程を広義に認識すれば、システム過程という概念自体の特性にフィードバック概念が本来内包されている。」、さらに、「システム過程運動は、対局からみれば、すべてフィードバック過程運動そのものであると理解できる。」として、ソーシャルワーク援助という目標に対する直接的過程を重視するあまり、フィードバックというシステム過程を評価するうえでの機能特性が間接的であると理解されてきたことから、積極的な意味を込めてフィードフォワード (feedforward) と、システム過程の持つ生産的なかつ創造的な内実が象徴されているように思えると述べている²⁶⁾。

フィードバックの諸相について、A system の援助過程に焦点化してフィードバックを考察すると、図 3-10 から、マイクロからマクロへの 4 段階からな

表 3-3 階層間における3通りのフィードバック過程

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">① 制度的な上位階層へのフィードバック② 制度的な階層レベルにフィードバックし吸収されて援助過程へと循環する過程③ 目標に対して直接フィードバックされて、実績の背景として機能する過程 |
|---|

出所：太田義弘，前掲『ソーシャルワーク実践とエコシステム』182頁から筆者が整理した。

る制度的システムが存在する。そして、システム階層間をめぐり3段階のフィードバック過程からなる(図3-10のB1・B2・B3)。さらに、その階層間過程は、それぞれ活用できる3通りのフィードバック過程を持っている(表3-3)。

上記の階層間における3通りのフィードバック過程(太田の整理)から、図3-10のB1過程について限定して、地域福祉実践からフィードバックが目標とする点を考察してみたい。

第1点の、制度的な上位階層へのフィードバックとして、さまざまな地域活動を体験して得た利用者や地域住民の声から、課題を整理すると共に、社会資源の改良や開発、代弁機能などを想定できる。

第2点の、制度的な階層なレベルにフィードバックし吸収されて援助過程へと循環する過程として、活動メンバーとソーシャルワーカーとの協働と参加によって、メンバーの主体性や意識の変容などやソーシャルワークスキル内容が具体性を帯びてくるので実践過程を評価しやすくなると想定できる。

第3点の、目標に対して直接フィードバックされて、実績の背景として機能する点として、過程活動組織の運営や所属機関との関係、行政との連携のあり方がどうあるべきなのか分かりやすくなると想定できる。

つまり、A1⇒A2⇒A3の過程による地域活動や利用者へのサービス提供から、B1⇒B2⇒B3へと、利用者や地域住民めぐる環境や社会資源を開発・改善すること、さらに、サービス提供する実施機関や所属する組織のあり方や教育、地域福祉過程局面(インターク⇒アセスメント⇒プランニング⇒インターベンション)へのフィードバックを志向すると考察することができる。

次の第4章では、これらの理論、枠組みから実践支援ツールを開発し、事例を使って地域福祉援助技術の方法を考察してみる。

[注]

- 1) 太田義弘・秋山蘭二編著『ジェネラル・ソーシャルワーク』20頁(2001年, 光生館)。
- 2) 中村沙織『ソーシャルワーク・アセスメント』35~37頁(2002年, 相川書房)。
- 3) 前掲書, 38頁。
- 4) 太田義弘『ソーシャルワーク実践とエコシステム』106~107頁(1999年, 誠信書房)。
- 5) 高森敬久・高田真治・加納恵子・平野隆之編著『地域福祉援助技術論』136頁(2003年, 相川書房)。
- 6) 渡邊洋一『コミュニティケアと社会福祉の展望』162頁(2005年, 相川書房)。
- 7) 前掲書, 156頁。
- 8) 太田・秋山, 前掲注1), 21~25頁。
- 9) 「利用者にとって生活とは、一つひとつの具体的な出来事の積み重ねからなる現実である。他者からは部分的にしか見えないが、独自の広がりや複雑な内容さらに独自の秩序を持って構成される、その固有な領域、関係、内容からなる世界を生活コスモスと読んでいる」太田義弘・中村佐織・石倉宏和編著『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング——利用者参加へのコンピュータ支援』7頁(2005年, 中央法規出版)。
- 10) 太田義弘, 前掲注4), 104~105頁。
- 11) 前掲書, 142~143頁。
- 12) 前掲書, 49頁。
- 13) 太田他, 前掲注9), 6頁。
- 14) 前掲書, 7頁。
- 15) 岩間伸之『ソーシャルワークにおける媒介実践論研究』134頁(2000年, 中央法規出版)。
- 16) 太田他, 前掲注9), 38頁。
- 17) 太田義弘『ソーシャルワーク実践と支援過程の展開』5頁(「スキルとは、ある事柄を価値や状況を包含した実態そのものとして『認識』し『洞察』すること」)(1999年, 中央法規出版)。
- 18) 平野方紹「社会福祉法施行の5年間を振り返って——社会福祉基礎構造改革を中間評価してみる」『社会福祉研究』第2号, 9頁。
- 19) 太田義弘, 前掲注4), 178~179頁。

太田は、ソーシャルワーク実践は、本来システムとしてマイクロからマクロへ、さらにマクロへとシステム循環するとし、ミクロ的援助と必要なサービス提供と、ニーズに応じたサービスの改善充実というマクロ的調整をしながら、実践機能を一定の水準で維持しようとする活動である、また、この通常の実践過程を構成する要素(施策・行政・実践機関)の持つ特殊事情や問題によっては、目的に対応するために、通常システム循環とは逆の機能を果たすことがあるとし、フィードバックとは、「システム過程で、処理されてきた情報をアセスメントし、目標に対する結果の適合状況を維持するために、情報を循環再処理するシステムのもつ基本的制御調整機能をいう」と述べている。

- 20) 太田義弘, 前掲注4), 182頁。
- 21) 阪口春彦『「社会資源の整備方法」の構想とフィードバックによる展開——マクロ・ソーシャルワークへのアプローチとして——』大阪府立大学大学院社会福祉学研究科社会福祉学専攻1997年度学位論文。
- 22) 岩間伸之『ソーシャルワークにおける媒介実践論研究』166頁(2000年, 中央法規出版)。
- 23) 前掲書, 167頁。
- 24) 太田義弘, 前掲注4), 173頁。
- 25) 前掲書, 176頁。
- 26) 前掲書, 180頁。

〔参考文献〕

- (1) 岩間伸之「ソーシャルワーク研究における事例研究法——『価値』と『実践』を結ぶ方法——」『ソーシャルワーク研究』Vol.29, No.4 (116), 2004年, 相川書房
- (2) 太田義弘・佐藤豊道編著『ソーシャルワーク:過程とその展開』1984年, 海声社
- (3) 太田義弘・中村佐織・石倉宏和編著『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング』2005年, 中央法規出版
- (4) 太田義弘「臨床福祉学特殊研究博士後期課程ゼミ」2004年1月16日
- (5) 太田義弘『ジェネラル・ソーシャルワーク』2001年, 光生館
- (6) 太田義弘『ソーシャルワーク実践とエコシステム』1999年, 誠信書房
- (7) 大橋謙策監修『地域福祉実践の視点と方法』1996年, 万葉舎
- (8) 大和田猛編著『ソーシャルワークとケアワーク』2004年, 中央法規出版
- (9) 阪口春彦『「社会資源の整備方法」の構想とフィードバックによる展開——マクロ・ソーシャルワークへのアプローチとして——』大阪府立大学大学院社会福祉学

研究科社会福祉学専攻 1997 年度学位論文

- (10) 中村佐織『ソーシャルワーク・アセスメント——コンピュータ教育支援ツールの研究——』2002 年，相川書房
- (11) 平野孝之・宮城孝・山口稔編著『コミュニティとソーシャルワーク』2001 年，有斐閣
- (12) 平野方紹「社会福祉法施行の 5 年間を振り返って——社会福祉基礎構造改革を中間評価してみる——」『社会福祉研究』第 93 号，2005 年，鉄道弘済会社会福祉部
- (13) 樋下田邦子「JA 助け合い組織におけるソーシャルワーク実践研究——主体力形成プロセスの枠組みをもとに」日本福祉大学大学院社会福祉学研究科福祉マネジメント専攻修士論文，2003 年